

高等学校日语教材

# 日本历史与文化

(古代篇)

日本の歴史と文化 (原始から近世まで)

刘金钊◎主审 贺静彬◎主编



大连理工大学出版社  
DALIAN UNIVERSITY OF TECHNOLOGY PRESS

© 贺静彬 2003

图书在版编目(CIP)数据

日本历史与文化(古代篇) / 贺静彬主编. — 大连: 大连理工大学出版社, 2003.7

高等学校日语教材

ISBN 7-5611-2344-2

I. 日… II. 贺… III. 日语—高等学校—教材 IV. K313.0

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2003)第 016027 号

大连理工大学出版社出版

地址:大连市凌水河 邮政编码:116024

电话:0411-4708842 传真:0411-4701466 邮购:0411-4707961

E-mail: dutp@mail.dlpt.ln.cn URL: http://www.dutp.cn

大连理工印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

---

幅面尺寸: 140mm × 203mm 印张: 9.5 字数: 236 千字

印数: 1 ~ 3 000

2003 年 7 月第 1 版

2003 年 7 月第 1 次印刷

---

责任编辑: 王佳玉 于福岳 责任校对: 樱 梅

封面设计: 王福刚

---

定 价: 18.00 元

# 前 言

日本文化虽然是东方文化传统的产物，但是却独具特征。如果要一句话来概括日本文化的特征，似乎可以说日本文化更追求内涵。所谓内涵，似乎可以解释为精神。因此可以说，日本文化与辉煌的外表相比更重视精神，应该说日本文化是一种精神文化。举个例子来说，表现日本文化特征的“もののあわれ”、“わび”、“さび”等词汇，其深刻含义究竟何在？究竟表现了日本人的一种什么精神？对于这个问题，即使是学过多年日语并了解日本文化的人，恐怕也是一时难以琢磨透的。因为精神是看不到、摸不着的，只有通过长期体会才能深刻领会。

一般来说，文化是在历史发展的过程中不断形成的。当然，日本文化也不例外。要深刻理解当代日本文化，学习、研究日本历史恐怕是必经之路。否则，对当今日本文化的理解只能停留在肤浅的表面，最多也不过是知其然不知其所以然。尤其是精神方面的东西，决不是一朝一夕才能形成的，更需要我们去追本溯源。举一个大家都熟知的例子，我们常说学习日本人的团队精神。确实，

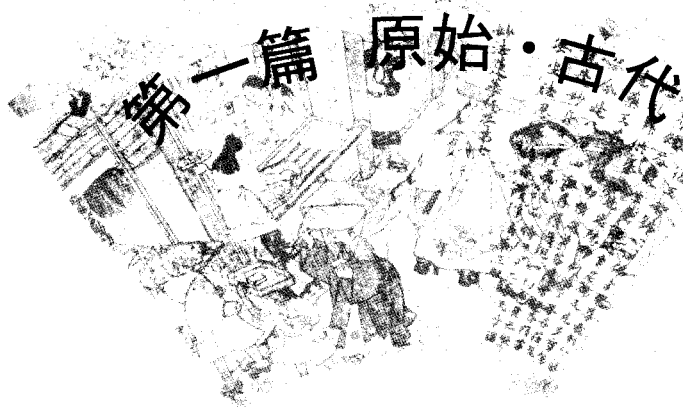
日本人总是愿意把个人置于团队之中,孤掌难鸣,孤雁难行,这种思维观念在日本人的头脑中早已根深蒂固。今天,日本人表现出来的这种团队精神,有其深刻的历史根源。有资料记载,说是日本人的团队精神始于稻作(弥生时代),因为种植水稻需要团结协作,互相配合才能完成,这样才逐步养成了团队精神。我个人认为,其道理恐怕并非如此简单。试问,我国历史上也应该经历过稻作时期,我们也应该养成团队习惯,为什么今天要向人家学习呢?其实,日本人团队精神的形成背景是很复杂的,原因也是多种多样的,其主要原因并非稻作。日本人受中国传统的儒教思想影响颇深,孔子的中庸之道成为许多日本人,特别是老一代日本人的行为准则。“人怕出名,猪怕壮”和“树大招风”(出る杭は打たれる)是许多日本人的处世哲学。把个人置于集体之中,这样更有安全感,可以说这是日本人团队精神的思想基础。再举一例,我们常评论说,日本人对待工作态度十分认真,办事计划性强,循规蹈矩等等。可以说,这是日本民族的显著特征之一。有研究证明,自古以来,日本人“权者顺从”的思想倾向严重,尊重“秩序”,喜于把自身置于“框框”的束缚之下。这些行为都与历史紧密相关,割断历史,空谈现象,当然只能成为茶余饭后的闲聊,谈不上学习与借鉴。

众所周知,文化是语言赖以生存的土壤,缺少文化底蕴的外语即使学得再好,也难以灵活得体并恰当准确地应用它。而本书是以有一定日语阅读能力者为对象编写的,通过阅读这本《日本历史与文化(古代篇)》,可以纵向地了解日本社会以及文化的发展,在扩大知识面、深层次接触日本社会、风俗、文化的同时,又能提高语言水平,丰富词汇量。

# 目 次

|                            |     |
|----------------------------|-----|
| 第一篇 原始・古代 .....            | 1   |
| 第一章 日本文化の始まり .....         | 2   |
| 1. 原始社会の生活と文化 .....        | 3   |
| 2. 水稻農耕の普及と社会の変化 .....     | 9   |
| 第二章 古代国家と東アジア文化の摂取 .....   | 22  |
| 1. 大和政権と東アジア文化の影響 .....    | 23  |
| 2. 推古朝の政治と飛鳥文化 .....       | 32  |
| 第三章 律令国家の形成と古代文化の発達 .....  | 51  |
| 1. 律令体制の成立と白鳳文化 .....      | 52  |
| 2. 奈良朝の政治と天平文化 .....       | 58  |
| 3. 平安時代初期と弘仁・貞観文化 .....    | 66  |
| 第四章 貴族政治と国風文化 .....        | 92  |
| 1. 荘園の発達 .....             | 93  |
| 2. 摂関政治と日本国風文化 .....       | 94  |
| 3. 武士の成長と源氏の台頭 .....       | 104 |
| 4. 院政・平氏政権と日本国風文化の展開 ..... | 105 |

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 第二篇 中世 .....              | 129 |
| 第五章 武家政治の成立と中世文化の形成 ..... | 130 |
| 1. 鎌倉幕府の成立と封建社会 .....     | 131 |
| 2. 執権政治 .....             | 134 |
| 3. 鎌倉文化 .....             | 140 |
| 4. 元軍の襲来と幕府の衰退 .....      | 146 |
| 第六章 武家社会の成長と中世文化の展開 ..... | 166 |
| 1. 室町幕府の成立 .....          | 166 |
| 2. 社会の変化と民衆の成長 .....      | 175 |
| 3. 室町時代の文化 .....          | 177 |
| 第三篇 近世 .....              | 201 |
| 第七章 幕藩体制の確立と近世文化の興隆 ..... | 202 |
| 1. 織豊政権 .....             | 203 |
| 2. 桃山文化 .....             | 208 |
| 3. 幕藩体制の成立と鎖国 .....       | 211 |
| 4. 経済の発展 .....            | 219 |
| 5. 元禄文化 .....             | 223 |
| 第八章 幕藩体制の動揺と近世文化の成熟 ..... | 254 |
| 1. 幕政の改革 .....            | 255 |
| 2. 化政文化 .....             | 260 |
| 付 録 .....                 | 279 |
| 主要参考文献 .....              | 296 |



# 第一章 日本文化の始まり

## ● 概観

人類の遠い祖先が地球上に現れたのはいまから400万年以上も前のことと言われる。人類が出現してからも、地球上は気候の周期的変化のため、北半球の大陸の大部分が数回にわたって氷河におおわれたが、その間に人類は、石を打ちかいた石器をつくり、火を使いはじめた。日本列島は中国の北京原人が使用したものに近似した20万年近く前のものと思われる石器が発見されている。



約1万年前ごろ、最後の氷期が終わり、気候が温暖になり始めると、中国でも日本でも、石器のほかに土器をつくりはじめたことが、最近の研究で明らかにされている。日本のこの縄文文化は、約8,000年つづいたが、その間、中国ではすでに約6,000年前ごろ、華中で稲作が行われており、約4,000年前には黄河流域で古代中国文明がおこり、やがて青銅器、ついで鉄器の文明が栄えた。この水稻農耕は、縄文晩期に九州北部に伝わり、やがて日本に弥生文化がおこって、鉄器・青銅器も朝鮮半島をへて伝入した。水稻農耕や金属器の使用が本格化して、日本

の社会は大きく変化し、文明の夜明けを迎えたのである。

## 1. 原始社会の生活と文化

### ● 日本人の祖先

1949(昭和24)年の夏、群馬県新田郡笠懸村岩宿の丘の切通しで、地元かきかけ いわじゅく きりどおの考古学青年相沢忠洋あいざわただひろが、それまで遺物をまったくふくまないと考えられてきた関東ローム層のなかから、人間が加工したとみられる槍先やりさきのような形の石をみつけた。この発見により、土器をとまなう縄文文化じょうもんを日本最古の文化とするそれまでの常識はくつがえされ、日本に旧石器文化きゅうせっきのあったことがあきらかになった。岩宿遺跡出土の石器は2万4000年以前にさかのぼるとみられ、これをつくった人は、現代人の直接の祖先であるクロマニヨン人と同じ段階の人類と考えられている。

その後、今日までに発見された旧石器時代の遺跡の数は、日本全国で3,000カ所にもおよんでいる。なかでも宮城県みやぎの座散乱木遺跡ざさんらんぎ・馬場壇A遺跡ばばだんの発掘は、日本の旧石器時代をさらにさかのぼらせることとなった。まず、1976(昭和51)年から発掘がはじまった座散乱木遺跡では、4万年以上も前のものとみられる打製石器だせいが発見された。そのにない手は、年代から考えるとネアンデルタール人と同じ旧人きゅうじんだった可能性がある。

1985(昭和60)年、宮城県の馬場壇 A 遺跡では、20 万年前にさかのぼるとみられる地層から打製石器が発見された。これにより、日本にもピテカントロプスや北京<sup>ペキン</sup>原<sup>げん</sup>人<sup>じん</sup>のような原<sup>げん</sup>人<sup>じん</sup>の段階の人類が生活していた可能性がでてきた。また、馬場壇 A 遺跡の11~14 万年前の地層から出土した石器には、動物の骨や肉・皮を加工したり、調理したらしい<sup>こんせき</sup>痕跡<sup>こんせき</sup>がみうけられたり、その石器に付<sup>ふ</sup>着<sup>ちやく</sup>していた脂肪<sup>しぼう</sup>の種類を科学的な分析によって調べた結果、ナウマン象やオオツノジカの脂肪ににていることもわかった。このことから、これらの石器を残した人々が、大型動物をとらえて食料としたり、皮や骨を利用したようすが具体的にわかるようになったのである。

このように、最近の考古学の進歩は、日本人の祖先をより古い時代へとさかのぼらせ、その生活の具体的な姿をあきらかにしつつある。

## ● 日本列島と日本人

地球上に人類が誕生したのは、今から約 400 万年前で、人類

は地質学<sup>ちしつがく</sup>でいう更新世<sup>こうしんせい</sup>の時代をつうじて発展した。更新世は<sup>ひょうが</sup>氷河時代ともよばれ、海面は現在より 100m 以上も低いときがあった。

そのころ、日本列島<sup>にほんれいとう</sup>はアジア大陸と陸続きになり、北からはマンモスやヘラジカ、南からはナウマン象やオオツノジカがやってきた。人類もこれらの動物を追いかけて大陸から渡ってきたらしい<sup>①</sup>。

人類は、猿人・原人・旧人・新人の順に進化したが、日本列島で発見された化石人骨は、愛知県の牛川人が旧人段階と考えられるほかは、新人段階のものが多い<sup>②</sup>。これらの人骨の特徴は、中国南部の化石人骨とよくにており、のちの縄文人にもうけつがれている。

日本人の原型は、このようにアジア大陸南部の化石人骨に求めることができ、日本列島が大陸と切りはなされた縄文時代に、若干の変化を加えながら、弥生時代以降に渡来した人々との混血をくりかえして、現在の日本人が形成されたと考えられる。

### ● 旧石器文化

日本列島は、アジア大陸の東方海上に弓状につらなり、大陸とは海によって隔てられている。この列島は、長い時間をかけて、しだいに今日の地形に近い形を作っていたが、地質学でいう更新世(洪積世=氷河時代)の氷期には、海面が下降して、大陸と地つづきとなった。

更新世の時代は考古学上の旧石器時代に相当し、その文化を旧石器文化という。かつては、旧石器文化は日本列島に存在しなかったと考えられていた。しかし、岩宿遺跡の発見後(1949年)、各地で更新世の地層から、簡単な加工をした打製石器が発見され、最近では20万年近く前にさかのぼると思われるものすら発見されている。

旧石器時代人は、断崖だんがいの下の岩かげや洞窟どうくつの入口近くに住み、握槌にぎりつちやナイフ状の石刃せきじんなどを用いて、狩猟や植物採集を行い、火を利用して生活していた。この時代の人骨が、愛知県の牛川うしかわ、沖縄県の港川みなとがわ、静岡県しずおかの三ヶ日みっかびなどから発見されている。

● 縄文文化 更新世から完新世わんしゅうせき(沖積世)になると、人類は新石器時代に入り、土器も作り始めた。

日本の土器の起源は古く、約1万年前にさかのぼり、それから約8,000年間つくられた黒褐色こくかつしよくのもろい土器を、縄文土器とよび、この時期の文化を縄文文化という。

はじめは深鉢形ふかばちがたの尖底土器せんていがつくられたが、長い間にかめ形どびんや土瓶形どびんなど種類が増え、把手とってなども発達し、文様もんようも複製化していった。石器では、打製石器が現れ、石斧せきふ、石錘せきづいなど狩猟しかりようや漁撈ぎょらうの道具が豊富に作られた。また骨角製の釣針つりばり、銚もりや弓ゆみ矢やも使用されており、生活の多様化した様子がうかがえる。

● 縄文時代の生活 縄文時代の人々は、床が地面よりも低い竪穴式住居たてあなをつくって生

活した。住居の中央には炉ろがあり、一つの住居にふつう5~6人が寝起きた。集落は日当たりのよい台地に形成され、台地の裾すその湧水わきみずを飲料水に利用した。ふつう数軒の住居が集まって

集落をつくったが、のちには広場をかこんで10数軒の住居が環状に並ぶ大きな集落もつくられるようになった。

貝がらなど、食料ののこりかすなどが集落の外側に捨てられ、<sup>かいつか</sup>貝塚<sup>③</sup>ができあがった。また、集落の一角に木の実などをたくわえるための貯蔵穴が群集していることから、収穫物を共同で管理していたことがわかる。

人々は、集落近辺で狩猟・漁撈・植物採集の自給自足の生活を<sup>いとな</sup>営んでいたが、石器の原料となる<sup>こくようせき</sup>黒曜石(火山岩の一種)やサヌカイト(<sup>さぬきいし</sup>讃岐石、安山岩の一種)、装身用具の硬玉<sup>こうぎよく</sup>など、近くに産出しない物資は、遠隔地に出かけて採取するか、または交易によって手に入れた。

一般に東日本の集落遺跡の密度が高く、人口が西日本に比べて多かったのは、自然環境のちがいから食料資源に比較的恵まれていたためと考えられる。

## ● 縄文時代の社会と信仰

縄文時代の社会は、数千年の長期にわたってゆるやかな発展をたどった。その間、食料獲得の技術が進歩したことや、人口が増加したことは、集落の規模の拡大や数の増大から推測することができる。しかし、採集経済における技術の進歩は、乱獲による資源の<sup>こかつ</sup>枯渇の危険をとまなうので、狩猟動物の乱獲規制もおこなわれたと考えられる<sup>④</sup>。また、自然条件が悪化すると<sup>きが</sup>飢餓<sup>⑤</sup>にみまわれることもあり、一般に平均寿命は短かった<sup>⑥</sup>。

貝塚<sup>かいづか</sup>や住居跡などに残された遺物からみて、縄文時代の人びとは、狩猟、漁撈や植物採集によって生活し、それに便利な海、川、湖沼<sup>こしやう</sup>に近い台地や山間に堅穴住居の集落をつくっていた。縄文中期以降には、植物の種子<sup>たね</sup>をまくだけの原始的な農耕も行っていたと見られる。

人びとは、骨角<sup>かいがら</sup>、貝殻、ひすいなどで作った腕輪<sup>うでわ</sup>や首飾り、耳飾りなどで身を飾り、成人を示す抜歯<sup>ぼっし</sup>も行い、門歯に刻みを入れ、また女性や動物をかたどった土偶<sup>どぐう</sup>を作ったりした。これらの風習は、魔よけ、また病気を治すための呪<sup>まじな</sup>いといわれている。また、手足を折り曲げて埋葬する屈葬<sup>くつそう</sup>も行われた。

住居の規模や葬法などにあまり差異がないので、まだ社会に上下、貧富の差がなかったと見られる。また、特定の場所に産する石を材料とした石器が、かなり離れた地域から発見されるので、広い範囲にわたって交易がなされていたことがわかる。

● 縄文農耕論 土掘り用の打製石斧が存在することや、定着的な集落が発達することから、縄文時代に原始的な農耕があったとする学説がある。植物質食料の比重が高いことは一般に認められているが、縄文時代全般について、本格的な栽培技術が存在したかどうかについては意見がわかれている。また、佐賀県菜畑<sup>なばたけ</sup>遺跡や福岡県板付<sup>いたづけ</sup>遺跡で縄文時代晩期とみられる水田跡が発見されたことから、この時代の末期には稲作をおこなっていたとする説も出されている。

## 2. 水稻農耕の普及と社会の変化

● 弥生文化 紀元前 4 世紀の後半、北九州で大陸の影響を受けた新しい文化が起こり、短期間のうちに東方へ広がって、縄文文化と交代した。この文化は、縄文土器よりも一般にやや高い温度で焼いた赤褐色の弥生土器をともなうので弥生文化という。それは紀元 3 世紀ごろまで続いたが、この時代に水稻農耕と金属の使用が本格化し、日本の社会は大きく変化した。

弥生文化は、水稻耕作と金属器の使用を特徴とし、土器も赤褐色の弥生土器<sup>せき</sup>にかわった。青銅器<sup>せいとうき</sup>や鉄器の金属器、木材加工用の石斧<sup>せきふ</sup>や稲の穂<sup>ほ</sup>をかりとる石庖丁<sup>いしぼうちよう</sup>などの磨製石器<sup>ませい</sup>の製作、機織<sup>はたお</sup>りの技術などは、中国や朝鮮半島から伝えられたものである。また、西日本で発見されている弥生人骨のなかには、縄文人にくらべて背が高く、朝鮮半島の人々に近い要素もみられる。いっぽう、竪穴住居<sup>たてあな</sup>の構造や土器・打製石器の製作などには、縄文文化の伝統がうけつがれている。弥生文化は、日本在来の縄文文化と中国や朝鮮半島からきたあたらしい文化とが接触<sup>ゆうごう</sup>・融合して、うみだされたものと考えられる。

## ◎ 水稻農耕の普及

福岡県の板付遺跡<sup>いたづけ</sup>が発見され、九州北部では、すでにそのころ水稻農耕が始まっていたことが明らかにされた。しかし、他の地域にも水稻農耕が普及し、本格化するのには、弥生文化の時代になってからである。

静岡県の登呂遺跡<sup>とろ</sup>、山本遺跡や奈良県の唐古遺跡<sup>かむこ</sup>などから、水田の跡や農具などが多数発見されているが、それによると、水田は低湿地に作られ、あぜの土くずれを防ぐため、矢板や太い杭<sup>くい</sup>を立てならべた。農具は主に木製で、鋤、鋤、山下駄、臼、堅杵<sup>きね</sup>などが用いられた。稲は直播<sup>じかまき</sup>で、実ると磨製の石甌<sup>いしおうちゆう</sup>で穂首刈<sup>くびかり</sup>をして高床<sup>たかゆか</sup>の倉庫などに保管し、臼・堅杵を用いて脱穀と粃<sup>もみ</sup>すりを行い、一般にかめで煮て食べた。この水稻農耕は、中国の華中<sup>かちゆう</sup>から渡来したであろうとされている。大麦<sup>あわ</sup>・粟などの栽培も行われ、布を織ることも始まっていた。

## ◎ 金属器の使用

この時代にも磨製石器が広く用いられていたが、中国で発達し、朝鮮半島をへて新しく伝わった金属器が、しだいにこれにとってかわった。

中国では紀元前 1,500 年ごろ、殷<sup>いん</sup>の時代に青銅器の使用が始まり、周代<sup>しゅう</sup>にはその全盛期を迎えたが、この周代には鉄器も出現し、漢代<sup>かん</sup>にはこれが急速に普及した。漢王朝は紀元前 108 年、

朝鮮半島にも勢力を広めて楽浪郡(現在の平壤付近)などを設置したので、ここに漢文化がさかえ、その影響が日本にも及んだのである。

日本には、青銅器よりも早く鉄器が伝来し、鉄製の鎌、刀子などが用いられて、大規模な水田を作ることが可能となり、水稻農耕が急速に発展した。一方、青銅器としては、銅剣銅鉞、銅戈などがあったがそれらは朝鮮半島南部でも発見されている。銅剣などは大陸伝来のものと日本国産のものがあるが、日本国産品は幅広で刃がついていないので、本来は武器であったものが、宝器や祭器として日本に伝わったと思われる。

## ● 社会生活の変化

当時の人びとの住居は、これまでと大差のない竪穴住居であったが、集落は水稻農耕に便利な低台地に営まれることが多くなった。農耕による収穫量は、自然採集よりもはるかに大きく、貯蔵もできるので、生活は安定し、集落も大規模になった。他方では水稻農耕は、多くの共同作業が必要であり、また自然条件に大きく左右されるので、司祭的な指導者が必要であった。この指導者は、やがて集落の支配者となり、社会に階級が現れた。この時代には、九州北部でかめ棺墓や支石墓がさかんに作られ、また日本全国的に方形周溝墓もつくられたが、それらの中には銅剣、銅鏡、銅釧、玉類などを副葬したものも見られる。これは集落のなかに有力者が出現したことを物語っている。